



起 -OKOSHI- まちあるきマップ

歴史いきづくまち、^{おし}起

江戸時代初め家数もわずかだった起村は、美濃路の宿場に定められたことから、江戸時代を通じ街道沿いを中心に発展しました。街道沿いに残る町屋のほとんどは明治24年(1891)の濃尾震災後の建築ですが、宿場町時代の面影が残り、渡船場跡などの史跡や天然記念物の古木からも、街がたどった歴史が感じられます。また江戸後期に発達した織物業は、近代以降も隆盛し、力織機などの機械設備を備えた工場のほか、事務所、寄宿舍などの関連建物も建てられました。工場などの数は減りましたが、残る建物からは往時の繁栄を偲ぶことができます。



【起(旧美濃路)へのアクセス】

JR東海道本線「尾張一宮駅」または名鉄名古屋本線・尾西線「名鉄一宮駅」下車、一宮駅西口バスターミナル2番のりばから名鉄バス「起」行き「起」下車

編集・発行 一宮市尾西歴史民俗資料館 イラスト 内藤雄太

※「起まちあるきマップ」は、平成24年(2012)3月、名古屋工業大学是澤研究室(当時の)の協力を得て一宮市尾西歴史民俗資料館が編集・発行しました。本マップはその改訂版です。

平成24年(2012)3月初版発行 令和5年(2023)8月第2版発行

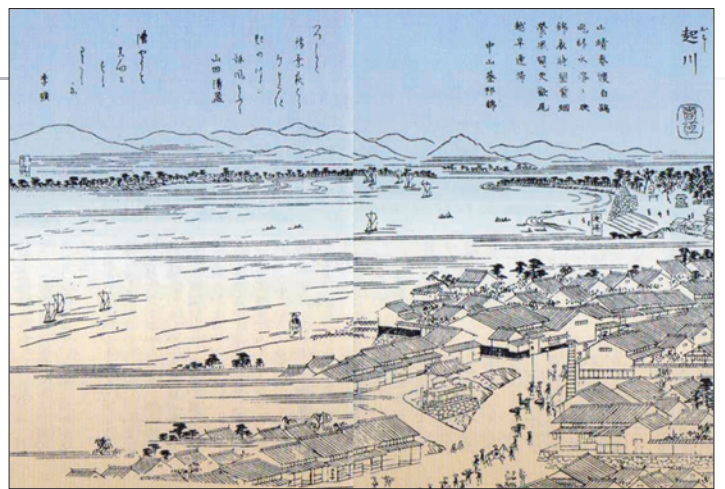
一宮市尾西歴史民俗資料館 愛知県一宮市起字下町211番地 TEL 0586-62-9711



こうさつば 起宿と高札場

美濃路は、江戸時代の東海道宮宿(熱田)と中山道垂井宿を結ぶ街道で、将軍上洛や朝鮮通信使・琉球使節の通行にも利用された幕府道中奉行管轄の街道でした。全長14里余(約57km)の道中に、七つの宿(名古屋・清洲・稲沢・萩原・起・墨保・大垣)がありました。美濃の輪中地帯を通り、起と大垣までの四里余の短い区間に、起川(木曾川)・小熊川(境川)・墨俣川(長良川)・佐渡川(掛斐川)が流れているのが特徴です。起宿は、その一つである起川の渡船場がある宿場町です。慶長5年(1600)徳川家康が関ヶ原合戦で勝利した後の凱旋時に開設されたという由緒を持ち、江戸時代後期には、本陣・脇本陣が各1軒、旅籠屋は22軒ありました。町並みは起の隣村富田から定渡船場の金刀比羅社まで続き、その中央付近に幕府の基本法令を書いた高札が掲げられた高札場がありました。

令和5年(2023)、高札場があった付近に、尾張名所図会にある挿絵の「起川」(右図)を参考にして、「起宿高札場跡」を整備しました。享和2年(1802)に起宿から幕府に提出された「御分間御絵図御用宿方明細書上帳」によると、高札場の大きさは、高さ一丈四尺五寸(約4.4m)、横幅三間五寸(約5.6m)、奥行五尺七寸(約1.7m)もあり、往来する人々に幕府の威光を見せつける意味もありました。高札場には、徒党やキリシタンの禁止、前後の宿場までの人馬賃銭が書かれた高札など、合計7枚の高札が掲げられていました。「起宿高札場跡」に整備された高札場は記録よりも小さく、高札は掲げられていた7枚の内、5枚を再現しています。その高札場付近に、宿場町の景観としての特色である枳形があり、ここを境に坂上(上町)と坂下(下町)に分かれます。下町には問屋場や本陣、脇本陣があり、旅籠屋も多く、宿駅機能の中核を担う家が集まっていた。上町は江戸時代の旧堤防の上に家並みが形成され、宿場開設後、新たに移り住んだ者が多く、木曾川の水運を活かして財を成した商人もいました。



尾張名所図会「起川」



起宿高札場跡

1 旧林家住宅・旧林氏庭園



旧林家住宅(国登録有形文化財(建造物))は、江戸時代に脇本陣職を務めた林家が、明治24年(1891)の濃尾地震で被災した旧建物に代わり大正2年(1913)に建築した住宅です。建物はガラス戸を用いるなど新しい建材も取り入れられていますが、外観や細部は伝統的な大型町家の形式を踏襲し、かつての起宿の景観を今に伝えます。

旧林氏庭園(国登録記念物(名勝地))は、昭和初期に当時の主が作庭した池泉庭園です。秋のモミジの紅葉など、四季折々で美しい景色を見ることができます。

2 本陣・問屋場



起宿本陣で使用された関札

問屋場は人馬継立をする場所で、宿場で最も重要な場でした。問屋を務める家は宿場内でも有力な家で、本陣を兼帯する場合もありました。

起宿の問屋・本陣は加藤家が江戸時代初期から明治維新まで世襲しました。加藤家は16世紀初頭の永正年間には起に定住していたとされ、起の開発者的な立場にあったと考えられます。江戸時代後期に本陣の主だった11代加藤磯足は本居宣長の弟子でも知られ、尾張を代表する文化人でもありました。

3 船橋跡



一般的に木曾川を渡る時は、大名から庶民に至るまで、船で渡りましたが、將軍の上洛や朝鮮通信使が川を渡る時は、船橋が架けられました。200艘以上の船を並べて固定した船橋は全長が475間(約863m)という長さでした。その長さは、名所で知られる富山神通川の船橋を超えました。朝鮮通信使が残した記録にもその壮大さが記されています。宝暦14年(1764)の朝鮮通信使通行が最後となり、船橋河戸という名称のみ残りました。愛知県指定文化財(史跡)。
※船橋跡石碑は令和5年(2023)に「起宿高札場跡」敷地内に移設しました。

4 宮河戸跡



大明神社付近にあったことからそのような名称となったと考えられます。この石碑の前には買継問屋の八百清があったことから、「八百清河戸」とも称されました。大通行時に定渡船場のみでは渡河機能が果たせない時や、定渡船が利用できなくなった時に臨時の渡船場になることがありました。

昭和31年(1956)、濃尾大橋が開通し、新たに堤防が設けられたことで景観は著しく変わりましたが、それまでは、石碑正面の小道から川まで行くことができました。愛知県指定文化財(史跡)。

5 起の大イチョウ



大明神社は起宿開設以前からこの地にあったとされ、大イチョウも宿場開設以前からこの地にあったと考えられます。対岸の羽島市や南の名神高速道路の橋からも目視が可能で、起のランドマークです。

大明神社は起の氏神ともいべき神社で、その祭神は不明でしたが、昭和2年(1926)旧郷社に昇格する際に、加藤氏の祖とされる中臣氏の祖神、大見屋根命を祭神としました。愛知県指定文化財(天然記念物)。



6 起のヤマガキ



大明神社境内の稲荷神社付近にあります。ヤマガキは山に自生するものですが、尾張の平野部でここまで生息しているのは珍しいとされます。愛知県指定文化財(天然記念物)。

稲荷神社の参道には、関ヶ原合戦時に木曾川を渡る東軍の福島正則が馬を繋いだ大木があったとされ、それを示す石碑が残っています。

7 起のイブキ



イブキの大木で、かつては旧家の玄関先に立っていましたが、現在木の周囲は駐車場などになっています。一宮市指定文化財(天然記念物)。

8 定渡船場跡



日常的に利用された渡船場。慶長13年(1608)に設けられたとされ、日常は2艘の船と臨時の置船の3艘で旅人たちの渡河に利用されました。対岸は美濃国大浦村で、起と同じく金刀比羅社が鎮座しています。

明治維新後、一時期は民営となりましたが、大正時代に愛知県営となり、昭和31年(1956)の濃尾大橋開通で廃止されました。現在は常夜燈がその名残を留めています。愛知県指定文化財(史跡)。

9 旧湊屋文右衛門邸



起で綿木綿の仲買商人として財を成した湊屋文右衛門の邸宅。定渡船場そばの美濃路沿いに立地します。湊屋は船方肝煎の役にもあり、参勤交代で美濃路を行き交う諸藩の川割役人と船方が渡河方法を取り決める川割宿として利用されました。

明治前期建築の店舗兼主屋は、起地区において濃尾地震にも耐えた数少ない町屋建築で、土蔵とともに国登録有形文化財(建造物)になっています。

のこぎりやね 鋸屋根工場群



建物上部が「のこぎりの刃」に似た工場建築で、主に北側に設けた高窓から外光を内部に取り込みます。

江戸後期には綿木綿を生産する織屋が多くみられた起地区などでは、大正前期から昭和後期にかけて毛織物などを生産する鋸屋根工場が数多く建てられました。近年は稼働する工場が激減し、鋸屋根工場の数も減少していますが、まだ街のあちこちでその姿を見ることができます。